

## IVUS のデータ整理

< よりよいデータ整理とは… >

小松 良司

仙台徳洲会病院 臨床工学技士

(はじめに)冠動脈インターベンションにおいて、血管内超音波(以下 IVUS)が臨床の場で使用されるようになってから、10 年が達とうとしている。その間、ニューデバイスやコンピューターの普及により、解析方法やデータ整理の方法も様変わりし、カテ室業務の 1 つとして必要不可欠なものになっている。今回、私が作成したデータベースをもとに、< よりよいデータ整理とは > について検討したので報告する。

### 1: データベースについて

ハードは、Macintosh 7600 及び G3 を使い、ソフトはファイルメーカープロ 4.0 を用いている。

特徴としては、集計したい項目 1 つ 1 つを、1 フィールドで作成している。レイアウトは、42 画面からなり、目の疲労を考慮し活字はなるべく大きくし、配色もバックグラウンドをグレースケールで作成し、文字色もなるべく明るい色を使用しないようにしている。欠点としては、画面が 42 画面と多いため切替等が不便である。また、フィールド数も 2000 あるため作成には時間を要し、再編集するが大変である。

### 2: IVUS の解析法及びデータ整理

病変の計測は、IVUS 上最も狭い部分を Lesion Center にし、前後 2 秒間隔 1mm で 2 ~ 6 カ所を計測していたが、病変長などを考慮すると不十分のため、病変長に合わせその前後を 2 秒間隔 1mm で解析している。そのため、ファイルメーカープロ等のデータベースでは、限界を感じ Excel を使用し、面積をグラフ化している。問題点は、病変に合わせて解析するため、解析数がかかり多く、計測に時間がかかりすぎること、写真の保管方法、集計・統計方法など、問題を多数抱えている。最近では、画像の保管にアルバムを使用し対処している。

### 3: まとめ

IVUS が臨床の場で使用されるようになってから、10 年が達とうとしている。

以前は、医師とともに、A4 サイズの紙に造影所見の写真を貼り、シェーマを記載し、IVUS をポイントポイントで計測し、写真を切り張りして、ファイルしていました。とくに合併症の症例などは、1 例で 4 ~ 5 時間もかけて納得のいくまで解析したことを思い出します。しかし、それで得られるものは、私にとってのちのち、大きな財産となっています。解析結果を数値化あるいは定量化し、また解析を合理化しようとするほど医師とのコミュニケーションが失われ、1 症例 1 症例の重要性が失われていくような気がします。時代は、デジタル化で私個人もそれに対応しなければならないませんが、IVUS のみならずデータ整理の方法は、切り張りやシェーマなどのアナログ化した方が、医師への情報提供としても、解析しているコ・メディカルにとっても意味のあるものになると考えます。それこそが、< よりよいデータ整理 > なのではないかと最近考えてます。